

## 還故郷講演（後編）

韓国統一思想研究院院長

李相憲 이 상 헌

この特別寄稿は、昨年十一月二十六日に韓国全羅南道務安郡（ムランブン）玄慶面（ヒョクギン）で、陽城李氏氏族を招いて統一思想研究院の李相憲院長が、「倫理観確立に関する思想講演会」と題して語られた内容です。

## （三）新しい価値観と南北統一

ここに神の真なる真理と真なる愛に基づいた新しい価値観、絶対的価値観の伝達は、理想郷建設の具体的な方案であると同時に、南北統一に対備するための具体的な方案でもあるという結論に達します。言い換えれば、民族的メシヤが還故郷して、氏族たちに新しい価値観、新しい倫理観・道徳観を伝えて、故郷全体が新しい価値観を日常生活において実践することができれば、そのような生活をもとにして理想郷の建設が始まります。それと同時に、金日成主体思想をもった地下工作員の侵入も自動的に防止できると同時に、全国のすべての民族たちが、このような新しい

価値観の生活をすれば、それが全国民の精神武装となるのです。そして金日成主体思想は、南の地には足を下ろす所を失ってしまいます。

その結果はどうなるでしょうか。総選挙に対する北の計画は失敗に終わります。そして真の南北統一は、真なる真理と真なる愛の運動が広まる中で行われます。その時、四十年間別れていた懐しい北の同胞たちとの真なる愛による涙の再会がなされると同時に、北にも新しい価値観による理想郷が立てられるようになります。このようにして真なる愛による南北統一、文字通りの和合による南北統一が達成されるのです。

以上をもって、還故郷の目的には二つあり、その具体的

方案は一つであるということ、すなわち新しい価値観（倫理観、道徳観）を伝えることであることを明らかにしました。それではこの新しい価値観、すなわち神の真なる真理と真なる愛に基づいた価値観とは、具体的にどのような価値観でしょうか。それは文先生の思想である「神主義」に内包されている価値観です。文先生が発表された統一原理と統一思想を合わせて神主義と呼びます。統一原理と統一思想の中に、驚くべき高次元の価値観が含まれています。すなわち、神の真なる真理と真なる愛を内容とする真善美に関する新しい観点が含まれているということです。

文先生はかつて人類を救うために長い間、祈りと瞑想の生活をされました。その間に、実存する神に出会われると同時に、その神から驚くべき偉大な内容の絶対的真理を伝授されました。その真理がすなわち神主義です。この思想を適用すれば、いかなる難問題も根本的に解決されることになっていきます。今日の社会的混乱を引き起こしているすべての問題は、人間が利己主義にとらわれて、互いに不和、対立、衝突の関係にあるために発生するのであり、神主義を適用すれば、それらは根本的に解決されます。それは真なる愛に基づいた絶対的価値観によって、利己主義が利他主義に変わり、不和、対立、衝突が和解と和合に変化する

からです。そしてこの思想は永遠不変の思想であり、永遠不変の価値観であるために、ここに成就された和合や和解も永遠不変です。したがって、ひとたび成立した平和は永遠不変の平和となります。言い換えれば、いかなる難問題もこの新しい価値観によって根本的に、完全に解決されれば、再び発生するということは絶対にはありません。そしてここに真なる愛による、和合と幸福の満ちあふれる、真なる平和の理想郷が到来するようになります。

以上でもって還故郷運動の具体的な方案を明らかにしました。すなわち還故郷運動の目的には二つありますが、その運動の方案はただ一つであって、新しい価値観の伝達であるということです。それと同時に、新しい価値観とは文先生の神主義の中に含まれた絶対的価値観であるということも明らかにしました。したがって還故郷運動の具体的な方案とは、結局、神主義の伝達ということになります。言い換えれば、氏族の住んでいる故郷に永遠なる理想郷を建設するためには、神主義すなわち統一原理と統一思想（特に統一原理）を伝達するということになります。

したがって民族的メシヤはこれから氏族の人々に、神主義すなわち統一原理と統一思想を伝達することになります。それで皆様は、この統一原理をある宗派の教理と考え



情進様4歳のお誕生日に祝禱される文先生ご夫妻 (1986.6.14)

は上官、父母、年長者、下には部下、子女、年少者、前には師、先輩、指導者、後には弟子、後輩、追従者、右には兄弟、同僚、親友、左には自己の意見と合わない者、また自己の怨讐までも相對しています。このようないろいろな階層の人たちを残らず愛するのが真の愛です。のみならず自然万物をも愛するのが真の愛です。そのような神の愛を実践に移すのが三大主体思想です。

ここで愛の定義について説明します。愛とは一体何でし

ないで、永遠なる理想郷を立てるための唯一なる方案であるということを理解していただき、皆様がいかなる宗教や思想をもっておられようと、それとは関係なしに、この原理を聞いてくださることを願います。

ところで時間の関係上、ここで統一原理の内容を皆様に説明することはできませんので、その代わり神主義の核心理論であるところの三大主体思想について簡単に紹介しようと思います。この思想の中に文先生の新しい価値観、新しい倫理観が集中的に含まれているからです。

### 三 三大主体思想

三大主体思想とは、三大主体が神の真なる愛を実践しなければならぬという思想です。ここで三大主体とは、父母と師と主人のことをいいます。言い換えれば、三大中心のことです。父母は家庭の中心であり、師は学校の中心であり、主人は主管の中心です。ここで主管の中心とは、団体や企業体や会社や国家などの中心をいうのであって、管理の責任者のことです。したがって団体の長（組合長、政党的党首、連合長等）、会社の社長、郡主、道知事、国家の大統領などは、みな主人の概念にあたります。すべて管理

責任者であるからです。

#### (一) 神の真なる愛

神の真なる愛とは、神の絶対愛のことをいいます。神は絶対者ですから、神の愛は絶対的の愛です。ここでいう絶対とは、世俗的な意味での絶対ではありません。絶対とは永遠不変にして無限なる遍在性をいいます。われわれは普通、神を永遠的存在で、無所不在の普遍的な存在だといっています。神は存在しない所がありません。したがって神の愛は永遠であり、神の愛のない所はありません。それは太陽の光線のようなものです。太陽光線は地球上、どこでも永遠に照らします。それと同じように、神の真なる愛は包括的であり、全人類はもとより、すべての万物にまでも施こされる愛です。被造物全体が神の愛の対象です。

宇宙には真なる愛から除外されるものは一つもありません。普通、愛といえば人間だけに適する愛と考えるかもしれませんが、文先生の言われる愛はそのような愛ではありません。真なる愛は、親しい人間同士はもちろんのこと、怨讐までもまた万物までも愛する愛です。人間は上下、前後、左右のいろいろな階層の人々と相對しています。上に

ようか。愛とは対象である人間や万物に温情を施して、その対象を喜ばせることです。対象のために尽くすことです。自分のためにするものではありません。世俗的な愛は自己の利益のために人を愛する愛です。ところが文先生の教える愛は、何ものも得ようとしないで、ひたすら他のために温情を施す愛です。このように愛とは、温情を限りなく他人に施すことです。いかにして施すのでしょうか。そこには「温和な話をする」とか、「相手をよく理解する」とか、「物質や金でもって助ける」とか、「協助する」とか、「奉仕する」とか、「難しい状況から救う」とか、「包容する」とか、「怨讐を許す」とか、「親切に教える」など、いろいろな表現の仕方があります。そのような方式で温情を施して、人のために尽くしなさいというのです。ために尽くしてまた尽くすのです。このような精神が利他主義または為他主義です。

#### (二) 三大主体の真なる愛

このように神の真なる愛とは、他の為に尽くして、また尽くす、そういう愛です。限りなく尽くすのです。あたかも温泉が限りなく湧き出てくるように、限りなく人々に温情の泉を注いであげるといことです。このような愛を日

常生活において実践しなさいというのが、三大主体思想です。すなわち神のこのような真なる愛を、父母は子女に対して実践せよということです。また師は弟子に対して施せよということです。また主人は社長として従業員に、会長として会員に対して、道知事や郡主として道民や郡民に対して、また政府として国民に対して、神の真なる愛を實踐せよということです。

ところで真なる愛をいかに実践するかというと、主体の役割を通じて実践することです。父母の子供に対する役割は子供を養育することです。ここで「養」とは、子供を育てることです。食べさせ、着させ、寝かせ、育てるのです。「養」を通じて愛を施すのです。よく食べさせ、よく着せ、よく住ませながら、愛を施すのです。温情を施しながら食べさせ、温情を施しながら着せ、温情を施しながら寝かせるのです。それが「養」です。それから「育」とは何かというと、家法を立て、礼儀作法を教えることです。倫理・道徳を親切に教えることです。娘に対しては純潔や貞節などの女性の道理を教えるのです。もちろん知識も教えます。

ここでも父母の温かい温情が必要です。このように父母は子女の養育を通じて神の愛を施すのです。子女を愛するに際して、父母は子女が成長した時に何か利益を得ようと思いません。そのような姿勢を持ってすべての温情を施して、学生に教えるのが師の真なる愛です。すなわち師の真なる愛とは、このような教育を通じて実践する愛のことです。

次は主人の役割を通じた主人の愛です。主人の役割とは何でしょうか。例えば企業体の社長の役割は、施設や従業員、職員たちを監督し管理することです。その場合、社長は部下や従業員に仕事だけさせて金ばかりもうけるという考えは捨てるべきです。企業体だから金もうけをするのは当然ですが、もうけた金は与えるのです。与えるためにもうけるというのが企業精神でなければなりません。企業の主人は為他主義の奉仕精神を持たなければなりません。すべての職員や従業員を愛さなければなりません。衣食住においても、何か困難はないかと、温情をもって部下や従業員を見詰めるべきです。これが愛による主管です。

主管には、部下に命令する主管もあります。命令自体は冷たいものです。しかし温かい温情の心をもって命令すれば、その命令自体はたとえ冷たいものであっても、命令を受ける方は感謝の心で受けますから、温かく感じるのである。また主管には、財産や施設の管理も含まれます。聖書には、人間に与えた神の三大祝福に関するみ言がありますが、そのうち第三祝福は愛によって万物を主管せよという命令で

いうような心をもってはいけません。子女を勉強させて、結局は子女のおかげで金を得ようというような考えをもつてはいけません。子女が善くして立派な人格を備えた知識人として、社会に奉仕し得る社会人間となることのみを願いながら、温情をもって養育することです。このような養育を通じて愛が、真なる父母の愛です。

次は師の愛です。師の役割は教えることです。すなわち知識教育、技術教育、体育、芸術教育などを施すことです。このような教育を通じて親切に学生たちに教えるのです。質問があれば誠意をもって答え、また学生たちに何か困難があれば、可能な限り助けてやり、問題を解決してやるのです。それが真なる神の愛の實踐です。そのようにするのが師の真なる道理であり、真なる師道です。近ごろの先生たちは収入のために教える場合が多くあります。それは知識を売買することにほかなりません。そのような教え方は絶対にいけません。そこには愛が宿るべきがないからです。

金をもうけることは第一の問題であって、師は真心をもって学生に教えることを最優先しなければなりません。そしてその教えは、社会に奉仕し得るような人格者に成長せしめる教育でなければなりません。そうするためには先生自身がまず人格的な姿勢、奉仕の姿勢を持たなければな

す。第一次産業、第二次産業、第三次産業など、物質を扱う活動はすべて万物主管にあたります。このような主管をいかにするかといえば、やはり愛をもってするのである。

建物や施設は、自分のものである前に公的なものであり、神のものであると見るのです。そして財産や施設を真心をもって管理し、維持し、保存する精神もまた「愛によって万物を主管する」という主管精神、管理精神です。近ごろの深刻な公害問題はみな、このような本然の主管精神、管理精神が欠けているために起きています。このような、万物に対する愛による主管精神、管理精神も、また主人の真の愛なのです。

### (三) 一つの中心の三主体性と三大主体思想

ここで三主体性とは、一つの中心が父母、師、主人の三主体の役割と愛を同時に行うことを言います。

父母と師と主人はそれぞれ別々の存在です。したがって父母も師も主人も、それぞれ主体としての役割と愛を實踐するのです。ところが、父母も師も主人も、各々が三つの主体の役割と愛を同時に実践することです。父母は主として父母としての役割を果たしながら、師と主人の役割も同時に果たしつつ、対象を愛することです。師も同様に、一人が



師の立場で教員を指導される文先生（1978.10.26.韓国・雪岳山にて）

のです。これが上向的な愛です。すなわち下向愛が上向愛を誘発するのです。また父母の真なる愛を受ければ、父母に対する孝行の心はもちろん、息子と嫁、すなわち夫婦の間に、また真なる愛が授受されるようになります。これは横的な愛、水平愛です。これも下向愛が水平愛を誘発した

三主体性を実践するのです。学校において、教師は師の役割を主として果たしながら、父母として学生を子女のごとく、養育できなければなりません。さらに主人として学生に対して、部下を管理、監督するような役割もしなければなりません。また主人も同様です。主人は、主管や管理が主な役割ですが、従業員に対して父母としての役割を果たし、師の役割も果たすのです。すなわち管理責任者である主人は、管理の仕事以外に、父母の立場で子女を養育する心でもって従業員の衣食住の問題にも常に関心を払わなければなりません。また師の立場で従業員に規範や知識を教えることもしなければなりません。

このように一つの主体（中心）が三主体性を同時に遂行するというのが、文先生の三大主体思想です。したがって父母の三主体性、師の三主体性、主人の三主体性の実践に関する思想がすなわち三大主体思想であるともいえるのです。

ところで父母、師、主人の愛はそれぞれ子女、学生、部下に対する愛であるために、下向的な愛です。このように一つの主体が三つの役割を通じて下向的な愛を实践すべきであるというのが三大主体思想です。

先に述べたように、自己中心に利益を得ようとするので

はなくて、他のために限りなく与えようとするのが真なる愛です。ここで銘記すべきことは、真なる愛は完全投入して忘れるということですが、与えて、与えて、忘れなければならぬというのが愛に関する文先生の教えのまた一つの特徴です。たとえ多く愛したとしても、自分が愛したという考えを持たないのです。忘れることによって、初めて自分の心が空になり謙遜になります。私はあの人をたくさん愛したのに、なぜあの人は何の反応も見せないのかというような心を持てば、傲慢になってしまいます。一度傲慢になれば、真なる愛を得にくくなります。だから愛してすぐ忘れなければなりません。そうして初めて、再び愛したい心がわいてくるのです。このようにして、常に新しい気分で愛するというのが文先生の愛の思想です。父母も、師も、主人も、みなそのようにしなさいということです。

#### （四）愛の拡散

父母が真なる愛を子供に施与すれば、子供は黙っているでしょうか。愛は誘発効果を起こします。したがって子供は父母の真なる愛に感銘して、感謝の心をもって父母に孝行せざるを得なくなります。父母が真心を込めて愛してくださったので、子供は父母に真心を込めて孝行したくなる

のです。このように父母の愛によって上向愛や水平愛が誘発されて家庭に愛が充満するようになります。

師の愛も同じです。師の真なる愛（下向愛）を受けた弟子は、自動的に師を心から尊敬するようになります。自分の先生は本当に偉大で、立派であるという考えがわいてきて、自然と先生の前に頭が下がるのです。知的要求を満たしてくださったことに心から感謝し、弟子たちは自然に先生を尊敬せざるを得なくなります。これまた上向愛です。東洋の古典には「弟子は師の影を踏まない」という言葉があります。そこには師が師としての道理を尽くしたから、弟子は弟子としての道理を尽くさざるを得なくなるという意味が含まれているのです。のみならず学生は師の真なる愛に感銘して、学生同士が愛し合います。これもまた横的な愛、水平愛です。

このような誘発効果を起こすのが師の愛（下向愛）です。新聞には、しばしば学生たちが先生を殴るという報道が出ていますが、その時、言論はこぞって学生を非難します。これは間違った非難ではないにしても、問題への接近の仕方を知らない非難です。学生の誤りは二次的な問題であって、一次的な責任は先生にあるのです。先生が誤ったので学生がそのようになったのです。先生が平常から三主

体性を実践すべきだったのです。それは殴られた先生個人の問題というよりは、一般的に先生たちが平常から三主体性を実践していないところにあります。もし、そうであれば、学生は先生を殴るはずがないのです。学生の暴力は、先生はなぜ我々に正しく教えなかったかという不平の表現形態であるとするべきです。

学生の暴力は父母にも責任があります。暴力をふるう学生の父母は子供に対して、父母としての下向愛を与えなかったに違いありません。だから、ちょうど父母のような先生を尊敬しなくなったのです。年長者を尊敬することを知らないのです。したがって、学生の暴力のような問題の解決は三大主体思想をもってなすべきなのです。そこに初めて解答が出てくるのです。すでに述べたように、三大主体の愛は、父母の子供に対する愛、師の弟子に対する愛、主人の部下に対する愛（下向愛）であつたのです。

原則的には下向愛が先です。下向愛から誘発されて、二次的に現れるのが上向愛、水平愛です。このように真なる愛の出発は下向愛です。これは真なる愛の根源が神であるからです。愛は神から先に下向的に来るのです。例えば企業体において、社長が従業員たちを本当に愛すれば、従業員たちには黙っていられない心が生じます。社長の愛に感

三大主体の根源はどこにあるのでしょうか。それは正に神にあります。すべてのものは神に根を持たなければ恒久性がありません。三大主体思想もそうです。神は人間の父母です。われわれがお祈りをする時に「天の父よ」と言います。「天の母よ」と呼ぶ人もいます。それは神が陽・陰の原理を持っているからです。とにかく神は、人間を神の子女として創造されました。人間は墮落したので罪人になつていますが、決して最初から罪人ではありません。人間は本来は神の子女です。神は人間の父母であると同時に真なる愛の本体なのです。

また、神はロゴスをもって宇宙を創造されました。ヨハネ伝の一章一節以下に記されているように、神はみ言（真理）でもって宇宙を創造されました。ロゴスとは真理であり、み言です。したがって神は真理の主体です。真理の主体とは何でしょうか。教師すなわち先生なのです。愛の主体である神は真理の師でもあるのです。

神はまた主人でもあります。創造主であるからです。創造主は主管の主人です。したがって神は最も根源的な父母、師、主人です。父母、師、主人を我が国の古来からの用語で表現すれば「君・師・父」です。君は国の主人であると同時に、管理の主体です。師は先生であり、父は父母のこ

銘して必ず反応します。例えば社長が多くもうけた程度に応じて、温情をもつて多くを分け与えようとすれば、従業員たちは社長を尊敬し、感謝します。そしてもし社長が会社の経営に困難をきたしたとすれば、従業員たちは「自分たちのサラリーを上げなくていいです。その費用で工場をもっと発展させてください」と言うほどになります。また社長が真なる愛を施せば、従業員相互間にもそのような愛が現れるようになります。これまた横的愛です。そればかりでなく、従業員たちは工場の施設や機械までも愛するようになります。

このように父母の愛、師の愛、主人の愛は常に先次的です。そして神の愛としての真なる愛が、家庭に拡散され、学校に拡散され、企業体に拡散され、さらには全国に広まり、ついには全世界にまで拡散するようになれば、地球上は神の愛によって充滿するようになります。その時、初めて地上のすべての犯罪は跡形もなく消え去ってしまいます。その時、初めて真なる平和、永遠なる平和が実現され、理想村が立てられるのです。このような運動を今、文先生は世界的に展開されているのです。

#### 四 三大主体の根源は神である

とです。われわれは古来からこのような「君・師・父」の思想を持っていたのです。そしてその思想の根が正に神なのです。

神自体が父母であり師であり主人です。愛国歌に「神が保護されたもう我が国、万歳」という句があります。神が何をもつて我が国を保護されたでしょうか。父母の愛、師の愛、主人の愛でもって我が国を保護されました。このように父母、師、主人の根が神であるために、三大主体思想は天道でもあります。したがって、三大主体思想は絶対的であり、永遠不変であつて、絶対に崩れることはありません。そして天道を犯す者、またはこの思想を守らない者がかえって被害を受けるのです。

今日、社会がこのように混乱に陥っているのは何のためでしょうか。それは人間が三主体の愛、すなわち天道を守らなかつたからです。我々は自然法則に逆らえば肉身に被害が及ぶことをよく経験しています。同様に、心も天道に従つて生きなければなりません。神に根ざしているのが天道であるために、天道を守らなければなりません。天道を守る時には平和がもたらされますが、守らなければ困難が生じます。従来の宗教がみな愛を強調した理由がここにあります。仏教は慈悲を行えと言ひ、儒教は仁を行えと言ひ、

## 統一史観

	先史	歴史の始元	歴史の性格	原動力	変遷の法則
統一史観	人間創造	墮落 (罪悪史)	再創造史 復帰摂理史 (善悪闘争史)	神の摂理と 人間の責任 分担	創造の法則 復帰の法則

統一思想の歴史観を統一史観といいます。統一史観では、歴史を第一に、人間の墮落に起因するところの「罪悪歴史」であり、第二に、人間の墮落によって未完成となった創造を再びやり直す「再創造史」であり、第三に、人間の墮落によって失われた創造理想の世界を取り戻す「復帰歴史」であると理解するのが基本的内容です。

今日までの人類歴史は、墮落によりサタン主管下に陥った罪人の為してきたものであり、略奪、殺戮、搾取、抑圧、憎悪などに満たされた罪悪歴史でありました。また一方では再創造の法則によって文化的、経済的には一進一退を繰り返しながら発展してきた再創造の歴史であり、他方では神の摂理によって神の側に分立された善の勢力とサタンの側に分立された悪の勢力との善悪闘争を通じて、次第により善の方向へ、すなわち失った創造理想の再実現の方向へ転換してきた復帰の歴史なのです。

このような歴史の展開において、歴史の目標と方向は決定的ですが、その目標がいかにして成就されるかは決定されていません。神の摂理のもとで人間の——特に摂理的な中心

人物たちの——責任使命が果たされるときに、それぞれの歴史過程が成功裡に達成されるようになっていきます。したがって歴史のたどる過程が直行か迂回か、短縮か延長か、それは全く人間の努力いかんにかかっています。すなわち、歴史の進行の過程や期間は非決定的であり、人間の責任に委ねられています。このように目標が決定的であるが、過程が非決定的であって、歴史の進行状況が人間の創意、工夫、努力の責任分担にかかっているという見解を責任分担論と呼びます。

統一史観はまた、神の摂理は信仰の義人を求め、善の家庭、氏族を整え、一つの民族(選民)を立て、その民族にメシヤを送って民族、国家的な救いの摂理をなし、救済摂理を全人類に広めようとしたと見ます。したがって歴史には、選民史と非選民史の区別が生じ、中心史と周辺史が現れたと理解します。

それゆえに統一史観は、人間の意志による責任分担の遂行いかんによって歴史路程や期間に差異が生じてきたと見ると同時に、歴史の進行は神の摂理的法則に従ってきたと見ます。その法則は、創造の法則と復帰の法則にほかなりません。

キリスト教は愛を実行せよと教えました。しかし、なぜそうすべきかという理由は、今日まで明らかにされなかったのです。

それは慈悲や仁や愛の根が、神の真なる愛にあったからです。それらは神の真なる愛であると同時に、三大主体の愛であったからです。父母と子女の関係を規定する儒教の三綱五倫も楨君説話に出てくる弘益人間、敬天愛人、光明思想も、三大主体思想の中に含まれます。キリスト教の愛の徳目も言うまでもありません。愛に関する先賢たちの教えは、みな例外なく三大主体の愛に含まれます。

今日、従来の価値観が衰退したのは、慈悲や仁や愛の根が、神の真なる絶対的愛にあるということが分からなかったからです。また、それが三大主体の愛として現れるということを知らなかったからです。言い換えれば、従来のすべての宗教の徳目の根は神の真なる愛であり、したがって、三大主体の愛であるということが明らかにする時、初めてすべての徳目が活性化されるのです。従来の徳目が現代の人々の心を指導し得る能力を再び回復するのです。

## Ⅵ 新しい価値観の定立

最後に、このような三大主体思想を土台として、新しい

価値観が立てられるということを説明します。三大主体の真なる愛の行為と、その愛によって誘発されるすべての対象の愛の行為、すなわち下向愛の行為と上向愛及び横的愛の行為など、すべての愛の行為を倫理的観点から見た場合、それは善です。知的、教育的観点から見た場合、それは真となり、美ともなり、善ともなるのです。これが文先生の価値観の概念です。

従来のすべての価値観の根が文先生の教えの中にあるのです。それで文先生の三大主体思想による価値観が、正に新しい価値観です。従来のすべての徳目にこの新しい価値観、すなわち三大主体思想を注入すれば、その根が蘇生してきます。このような価値観を多くの氏族の方々にお話しようとして、きょうの講演会をもった次第です。本講演会の題目が「氏族招聘倫理観確立に関する思想講演会」となっているのは、本来の理想郷は三大主体思想による価値観、倫理観に基づいた社会であるということを意味しているからです。以上で私の講演を終わります。

〈完〉